

雑談における日本語学習者による不自然な終助詞「ね」「よ」「よね」：『BTSJ日本語自然会話コーパス（2020年版）』を用いて

著者	宇佐美 まゆみ, 張 未未
雑誌名	国立国語研究所論集
号	23
ページ	29-57
発行年	2022-07
URL	http://doi.org/10.15084/00003565

雑談における日本語学習者による不自然な終助詞

「ね」「よ」「よね」

——『BTSJ 日本語自然会話コーパス (2020 年版)』を用いて——

宇佐美まゆみ^a 張 未未^b

^a 国立国語研究所 研究系

^b 早稲田大学

要旨

日本語学習者にとって終助詞の適切な使用は、日常のコミュニケーションを円滑に行う上で重要である。本研究では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス (2020 年版)』に収録されている、日中接触場面の雑談における日本語母語話者と上級・初級日本語学習者による終助詞「ね」「よ」「よね」の使用実態を場面別に調査した上で、学習者による不自然な用例を中心に考察した。その結果、①母語話者は初対面会話と友人同士の会話とで終助詞の使い分けが明確であるのに対して、上級学習者は場面による使い分けが不明確であった。②上級学習者は、初対面会話と友人同士の会話のいずれにおいても、「よ」を多用する傾向にあった。③初級学習者は、母語話者のみならず、上級学習者と比べても終助詞の使用率が低く、その中でも「よ」と「よね」に関しては、不自然な使用が多かった。④学習者による不自然な終助詞の使用は、「文」としては問題がなくとも、前後の文脈や状況を考慮すると不自然になるものも多く、不自然になる原因を一要因に特定することが困難であること、そのため、学習者の終助詞を使用する際の心理を考慮することも重要であることが明らかになった。これらの結果から以下の4点が明らかになった。①からは、人間関係による終助詞の使い分けと配慮を会話教育に取り入れる必要があること、②に関しては、「よ」の多用は相手に押し付けがましい印象を与えてしまう恐れがあるため、教育上注意する必要があること、③に関しては、文脈を提示して終助詞を経験的に習得させる必要があること、④に関しては、学習者のコミュニケーション能力の育成につなげるためには、単文レベルではなく、文脈と発話時の心理も考慮した終助詞の指導方法の開発が必要であることである。理論的には、今後、各終助詞の機能を談話レベルの文脈と関連づけて、体系的に説明する方法を探る必要があることが示唆された*。

キーワード：終助詞、雑談、自然会話コーパス、日本語学習者、不自然な使用

1. はじめに

終助詞は、聞き手にどのように伝えようとするかという話者の心的態度を表し、ポライトネスとも関係するため、日本語の会話においては極めて重要である。日本語教育においても、終助詞は、「他の文法事項と比べ周道的に扱われがちだが、学習者の社会言語的能力をのばす上で大切

* 本研究は、2020年5月26日にNINJALサロンにて発表した「雑談における日本語学習者による不自然な終助詞「ね」「よ」「よね」—『BTSJ 日本語自然会話コーパス 2018 年版』を用いて—」を加筆修正したものである。また、本研究は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」(プロジェクトリーダー：石黒圭) サブ・プロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」(プロジェクトリーダー：宇佐美まゆみ)、およびJSPS 科研費 18H03581 「語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築とその多角的解明」(研究代表者：宇佐美まゆみ)の成果の一部である。なお、統計処理については、早稲田大学データ科学センターのデータ科学研究相談の助言を得た。記して感謝する。

である」(ナズキアン 2005: 177) とされている。

このように、終助詞教育の重要性は認識されてきたが、その土台となる終助詞の使用実態についてはまだ十分に解明されていないのが現状である。とりわけ、対人関係によって終助詞の使用状況が異なる振る舞いを見せるのか、また、日本語学習者に不自然な使用がある場合、どのような状況、条件下においてそうなるのかなどの文脈を考慮したより精緻な記述が不足している。

そこで本研究では、対人関係に大きく影響するとされる終助詞「ね」「よ」「よね」に焦点を当て、『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2020 年版』(宇佐美監修 2020) (以下、『BTSJ 日本語自然会話コーパス』と略する) を用いて、日本語学習者による終助詞の使用上の問題点を、日本語母語話者の使用と比較しながら分析し、それが日本語教育にいかなる示唆をしうるかについて考察する。

2. 先行研究と本研究の位置付け

終助詞に関する研究は学際的であり、従来、日本語文法、日本語教育、言語心理学、認知科学等の多様な分野で様々なアプローチによって行われてきた。本章では、終助詞「ね」「よ」「よね」に関する研究を、その機能をめぐる言語学的・日本語学的研究、自然会話における使用実態を調査する実証的研究、学習者による不自然な使用に関する研究という三つのカテゴリーに分けて概観した上で、本研究の位置付けを述べる。

2.1 終助詞「ね」「よ」「よね」の機能に関する言語学的・日本語学的研究

終助詞「ね」「よ」「よね」の機能をめぐる研究は、「ね」(佐々木 1992 等)、「よ」(白川 1992 等) など単独の終助詞の機能について論じるものもあれば、終助詞「ね」「よ」「よね」の用法の相違に触れているものもある。後者に関しては、それらの機能が話し手と聞き手の情報や知識の帰属先、あるいは多寡に関わっていることが数多くの先行研究(陳 1987, 神尾 1990, 益岡 1991, 伊豆原 1993, メイナード 1993, 金水・田窪 1998, 伊豆原 2003, 大浜 2004 等)によって指摘されてきた。

「ね」と「よ」について、メイナード(1993: 105-109)は、「ね」は相手が話し手に比べてより詳しい情報、または同じ位の情報を持っていると考える時に使われ、「よ」はまだ相手が十分認識していない情報や話し手がより確実に握っている情報について、注意を促しながら相手に訴えるために使われるとしている。「よね」を加えて論じた伊豆原(2003: 13)は、「ね」は話し手と聞き手の認識の一致を前提として聞き手を話し手の領域に引き込む機能を、「よ」は聞き手の認識へのなんらかの変化を促す機能を、「よね」は話し手の認識が聞き手の認識と同じであるかどうかを確認する機能を持つと説明している。一方で、ナズキアン(2020)は、「よね」には、話し手と聞き手に認識の不一致があることを想定して確認する機能のほか、話し手の主張を緩和したり、聞き手の意見に強く共感したりするという語用論的機能もあるとしている。このような、終助詞を取り巻く環境、すなわち、前後の文脈や状況との結びつきから論じるものは他にも多数ある(宇佐美 1997, 中村 2006, 滝浦 2008, 定延 2016 等)。

以上簡単にまとめたように、終助詞「ね」「よ」「よね」個々の機能や用法の違いは明らかにされてきたが、それをどのように日本語教育の現場に結びつけるかについては、未だに課題が残っている。

2.2 自然会話における終助詞「ね」「よ」「よね」の使用実態に関する実証的研究

終助詞「ね」「よ」「よね」の自然会話における使用実態に関する研究を、母語場面、接触場面別に見ていく。

母語場面における終助詞「ね」「よ」「よね」の使用実態については、場面や話者同士の親疎関係、年代差等、社会言語学的な観点を取り入れた研究が進められてきた。宇佐美 (1997) は、改まり度の違いが明確な会議場面と雑談場面における「ね」の運用上の働きについて比較分析を行い、「ね」が場面に応じて使い分けられ、雑談場面では、主にポジティブ・ポライトネスとして、会議場面では、ネガティブ・ポライトネスとして機能していることを明らかにした。大曾 (2005) は、名大コーパスにおける親しい友人同士の雑談による終助詞「ね」「よ」「よね」の使用頻度を調査し、若年層には「よね」、熟年層には「ね」の使用が多いことを明らかにした。崔 (2015) は、『BTSJによる日本語話し言葉コーパス (トランスクリプト) 2011 年版』における初対面会話 6 会話を対象に、終助詞「ね」「よ」「よね」を調査し、3 種の終助詞は「要求型」「提示型」「表明型」の 3 通りの機能のタイプに分かれ、その中で「要求型」が圧倒的に多いとしている。

一方、接触場面にフォーカスした研究は、多くは、母語場面との比較によって行われてきた。崔 (2016) は、先述した崔 (2015) の枠組みを援用して、接触場面における初対面場面の 4 会話を調査し、学習者は母語話者とは異なり、「表明型」の終助詞の使用が多いことを明らかにした。また、崔 (2017) は、多様な国籍の学習者の会話データ 18 種をもとに分析した結果、学習者は「よ」の使用が多く「よね」の使用が少ない上に、終助詞別に機能の偏りも見られることを明らかにした。しかし、調査場面は初対面会話に限られており、話者の関係による使い分けについては言及されていない。一方、友人同士の会話にも注目した宇佐美 (2019b) は、『BTSJ 日本語自然会話コーパス (2018 年版)』におけるコア会話¹ 155 会話を扱い、「初対面会話」と「友人同士の会話」における母語話者と学習者による終助詞「ね」「よ」「よね」の使用傾向を調査し、母語話者は、学習者よりも終助詞の使用率が高く、初対面相手と友人相手による使い分けが明確であるのに対して、学習者は、「よ」と「よね」の話者の関係による使い分けが明確ではないことなどを明らかにした。しかし、155 会話という大量の会話を扱う中、学習者による不自然な終助詞の使用について、学習者の母語やレベルを考慮した質的分析にまでは至っていなかった。

2.3 日本語学習者による不自然な終助詞「ね」「よ」「よね」に関する研究

日本語学習者は、終助詞を使いこなすことが困難である (大曾 1986: 93) と指摘されて久しい。

¹「コア会話」とは、『BTSJ 日本語自然会話コーパス (2018 年版)』(333 会話)の中から、会話のジャンル (雑談)、場面 (母語場面/接触場面)、話者の社会的属性 (学生)、話者同士の面識の度合い (初対面/既知 (友人)、話者関係 (対同等)、性別 (男男/男女/男女) の条件を満たすものを抽出した 155 会話である。

近年、穴埋めテストなどを通して学習者の問題点を探る研究はもとより、学習者による実際の産出から終助詞の機能を検討する研究も数多く行われてきた。本節では、自然会話における学習者による不自然な終助詞の使用をめぐる研究を概観する。

次の表 1-1 は先行研究の調査対象を、表 1-2 は先行研究における不自然な終助詞の分類をまとめたものである。

表 1-1 自然会話における学習者による不自然な終助詞に関する研究：調査対象

先行研究	会話の場面	会話数	学習者の母語	学習者のレベル	調査した終助詞
初鹿野 (1994)	教師と学生の会話	40 程度	3 種	初級	ね
伴・架谷 (1996)	学習者同士の会話	1	中国語	上級	ね
ナズキアン (2005)	教師と学生の会話	不明	不明	初級・中級	ね, よ
高 (2008)	接触場面の初対面会話	4	中国語・台湾 国語	中級・上級	ね, よ
楊 (2008)	接触場面の初対面会話	18	中国語	中上級	ね
楊 (2010)	接触場面の初対面会話	10	中国語	中級・中上級	ね, よ
木曾 (2013)	調査者と学習者の会話	26	中国語	上級	ね, よ
吉田 (2013)	OPI データ (「日本語 学習者会話コーパス」 と「KY コーパス」)	131	韓国語	初級・中級・上級・ 超級	ね
高・崔 (2015)	接触場面の初対面会話	不明	中国語	不明	ね, よ, よね
崔 (2017)	接触場面の初対面会話	18	11 種	主に中級・上級	ね, よ, よね

表 1-1 からわかるように、自然会話における学習者による不自然な終助詞について調査した研究には、初対面会話を対象としたものが多く、友人同士の会話を分析したものは少ない。また、終助詞の「よね」を対象に含めたものが少ないことも不十分な点として挙げられる。このように、初対面会話と友人同士の会話とで、日本語学習者による終助詞「ね」「よ」「よね」の振る舞いがどのように異なるのかについては、先行研究では未だ観察しきれていない。

また、表 1-2 からわかるように、従来終助詞の問題とみなされてきたものは、必要か否か、相手にとって失礼になるか否か、使用状況にふさわしいか否かなど、異なる視点が混在している形でまとめられているものが多い。表 1-2 に示した 7 つの Type のうち、Type 1 にまとめられた「定型表現の濫用」は、「不必要な付加」、または「過剰使用」によるものであると考えられる。そのため、先行研究の中で指摘されてきた問題は、大きくは、「不必要な付加」、「必要な箇所での欠如」、「異なる終助詞の混同」、「周辺要素との絡みで不自然」、「過剰使用」、「過少使用」の 6 種にまとめられる。「過剰使用」と「過少使用」は使用量の問題であり、それ以外は使用の可否にかかわる問題となっている。崔 (2017: 145) では、「終助詞以外の文法的要素において逸脱が生じたことで、終助詞の機能さえも逸脱するケース」を「周辺要素による誤用」としており、終助詞の不自然さは他の文法的要素の逸脱によって生じるものだという解釈になっている。終助詞と周辺要素との関連や、それが発話の自然さにどのように関わるのかなどについては、更なる検討が必要であると思われる。

表 1-2 自然会話における学習者による不自然な終助詞に関する研究：不自然な終助詞の分類

先行研究	Type 1 定型表現の 濫用	Type 2 不必要な 付加	Type 3 過少 使用	Type 4 必要な箇所 での欠如	Type 5 異なる終助詞 の混同	Type 6 周辺要素との 絡みで不自然	Type 7 過剰 使用
初鹿野 (1994)	「そうですね」 の誤用	付けてはいけ ない箇所での 「ね」の使用	—	—	—	—	—
伴・架谷 (1996)	—	—	過少 使用	—	—	—	—
ナズキアン (2005)	「そうですか」 と「そうです ね」の混同	目上の相手 に対して「よ」 の使用が非礼 になる場合	—	必要な終助 詞がない	「そうですか」 と「そうです ね」の混同/ 「よ」がふさわ しい状況で 「ね」が使わ れる/目上の相 手に対して 「よ」の使用が 非礼になる場 合	男性による「元 気よ」などの使 用/下降調イン トネーションの 「よ」が非礼に なる場合	—
高 (2008)	—	—	過少 使用	—	—	「んですね」の 不適切な使用	過剰 使用
楊 (2008)	—	—	過少 使用	—	—	—	—
楊 (2010)	—	—	—	—	「ね」がふさわ しい状況で 「よ」が使わ れる	—	過剰 使用
木曾 (2013)	「そうですね」 の誤用	相手が知って いる情報を確 認する際に使 用する「よ」 /一方的な情 報提供の「ね」 と「よ」	—	—	相手が知って いる情報を確 認する際に使 用する「よ」 /一方的な情 報提供の「ね」 と「よ」	普通体に付加し た「ね」と「よ」	—
吉田 (2013)	—	—	—	—	他の終助詞と の混用	「のだ」文にす べきところに 「ね」を使用し ているもの	不必要 な付加
高・崔 (2015)	—	「ね」「よ」「よ ね」のいずれ も使用できな いのを使用した 逸脱	不使用 による 逸脱	使用が必須 なものに対 し、使用し なかった逸 脱	種類の選択の 逸脱	その他の逸脱	付加に よる 逸脱
崔 (2017)	誤用（定型表 現の濫用）	—	不使用	誤用（脱落）	不自然な使用 （混同）	誤用（周辺要素 による誤用）	過剰 使用

2.4 本研究の課題

上記の残された課題を受けて、本研究では、異なるレベルの日本語学習者が、対話相手が初対面の場合と友人の場合とで、終助詞「ね」「よ」「よね」の使用傾向が異なるかどうかを、母語話者の使用傾向と比較しながら明らかにする。使用傾向の相違を踏まえた上で、学習者による終助

詞の使用には、不自然なものがどのくらいあるのか、また、どのようなものがあるのかについて質的に考察する。

3. 研究方法

本研究では、「総合的会話分析」(宇佐美 2008・2013・2015)の方法論に基づき、『BTSJ 日本語自然会話コーパス』を用いて、母語話者と学習者の終助詞「ね」「よ」「よね」の全体的使用傾向を定量的に明らかにした上で、学習者による終助詞の不自然な使用に着目して定性的に考察していく。

3.1 本研究で扱うデータの概要

『BTSJ 日本語自然会話コーパス』の中から、以下の選定基準によって、接触場面における初対面会話と友人同士の会話データを選定した。

- ① 学習者による終助詞の使用を分析するため、接触場面の音声付きの会話であること。
- ② ①で選出された会話データの中で、学習者の母語が同一で、話者同士の親疎関係(初対面であるか、友人同士であるか)による比較ができるもの。
- ③ 初級と上級のレベルの比較ができるもの。

会話数の最も多い中国語を母語とする学習者による音声付きの会話は、上級学習者による初対面場面の3会話、上級学習者による友人場面の5会話、初級学習者による友人場面の5会話があるが、5会話ずつの友人会話に合わせるために、台湾国語を母語とする上級学習者による初対面の全5会話から2会話を抽出し、加えた。

選定した全15会話²は、すべて女性同士の会話である。選定した15会話の総会話時間は5時間40分4秒で、総発話文数は5813である。

3.2 定量的分析

まず、母語話者と学習者(上級、初級)それぞれが、どのくらい終助詞を用いているかを分析するために、終助詞「ね」「よ」「よね」の総数と当該話者の総発話文数に占める割合を場面・話者別に算出した。次に、これら3種の終助詞総数に占める「ね」「よ」「よね」それぞれの割合を場面・話者別に算出した。『基本的な文字化の原則(BTSJ)2019年改訂版』(宇佐美 2020)によれば、1発話文が1ラインで終わる場合と複数のラインにわたる場合があるが、本研究では、全てのラインに出現した終助詞をカウントした。また、()の中に括られた相手の発話に重なる短いあいづちに出現した終助詞も、カウントに入れた。1発話文に終助詞が複数回出現した場合、複数回とカウントした。なお、以下の場合もカウントに含めた：①倒置、②直後に他の終助詞が置かれる場合：「よな」、③直後にヘッジが置かれる場合：「よ／ね／よねって」「よ／ね／よねっ

² 上級学習者による初対面場面の5会話の通し番号は280、281、283、284、286であり、初級学習者による友人場面の5会話の通し番号は319、320、321、322、323であり、上級学習者による友人場面の5会話の通し番号は324、325、326、327、328である。

なんか」「よ／ね／よねとか」。

続いて、学習者（上級、初級）による不自然な終助詞を認定し、終助詞の総数に占める割合を場面別に算出した。学習者による不自然な終助詞の数がどれだけ信頼性のあるものかを検討するために、終助詞の使用が多い上級学習者と母語話者の初対面の会話、友人同士の会話から1つずつ選択し、不自然かどうかの判断に対して、日本語の談話研究者である評定者2名による「評定者間信頼性係数（カッパ係数）」を求めた。その結果、終助詞「ね」の場合、 $\kappa = .84$ 、「よ」の場合、 $\kappa = 1$ 、「よね」の場合、 $\kappa = .83$ 、という高いカッパ係数が確認された。その後、評定が一致しなかった箇所については、評定者の間で合意を得るまで検討し、結果を定めた。

終助詞の集計は、BTSJに適する分析ツールである『BTSJ文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット』（宇佐美 2019a）を用いて行った。集計後の統計処理は、R (ver.4.1.1)を用いて行った。

3.3 定性的分析

定量的分析の結果を踏まえた上で、学習者による不自然な終助詞の使用の要因についてコーディングを行うが、本研究では、先行研究を参考にしながら、次のA～Dの4種に暫定的に分類した。分類を行う際に、前後の文脈に鑑みて、分類項目の妥当性を再検討する。

- タイプA 「異なる終助詞の混同」：「ね」「よ」「よね」の中の他の終助詞を選択すべき場合
- タイプB 「不必要な付加」：終助詞を付加すべきではないところに付加されている場合
- タイプC 「必要な箇所での欠如」：終助詞を使用すべきところに使用されていない場合
- タイプD 「周辺要素との絡み」：「のだ」や丁寧体・非丁寧体など前後のモダリティ表現に問題がある場合

2.3で言及した終助詞の「過剰使用」と「過少使用」は、当該ジャンルの会話における「基本状態」（宇佐美 2001）から判断する必要があるが、今回はデータ数が十分とは言えないため、対象外とした。

4. 定量的分析の結果

本節では、母語話者と学習者（上級、初級）による終助詞「ね」「よ」「よね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合の結果を、終助詞全体と終助詞別に分けて示す。4.1には、終助詞全体、4.2～4.4には、「ね」「よ」「よね」それぞれの、母語話者と上級学習者の初対面場面と友人場面における結果、及び、友人場面における母語話者の対話相手（上級学習者、初級学習者）別の結果を示す。続く4.5には、母語話者と学習者による終助詞「ね」「よ」「よね」それぞれについて、頻度と3種の終助詞総数に占める割合を示す。4.6には、上級学習者と初級学習者による不自然な終助詞の使用傾向を場面別に示す。

4.1 終助詞全体（「ね」「よ」「よね」）の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合

終助詞「ね」「よ」「よね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合について、4.1.1には母語話者と上級学習者による初対面場面と友人場面の場面別の結果、4.1.2には友人場面における母語話者の対話相手（上級学習者、初級学習者）別の結果を示す。

4.1.1 母語話者と上級学習者による初対面場面と友人場面における終助詞「ね」「よ」「よね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合

以下の表 2-1、表 2-2 に、母語話者と上級学習者による初対面場面と友人場面における終助詞「ね」「よ」「よね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合（%）、及び、カイ二乗検定の結果を示す。なお、有意差が認められなかった場合は χ^2 値や p 値は省略した（以下同）。

表 2-1 母語話者と上級学習者による「ね」「よ」「よね」の使用頻度と割合（%）：初対面場面（5 会話）

話者	終助詞総数	総発話文数
母語話者	117 (15.06)	777 (100)
上級学習者	151 (17.40)	868 (100)

表 2-2 母語話者と上級学習者による「ね」「よ」「よね」の使用頻度と割合（%）：友人場面（5 会話）

話者	終助詞総数	総発話文数
母語話者	294 (23.73)	1239 (100)
上級学習者	207 (20.23)	1023 (100)

表 2-1 と表 2-2 からわかるように、初対面会話においても、友人同士の会話においても、母語話者と上級学習者の間には、終助詞の使用率に有意な差はなかった。

次に母語話者の、対上級学習者の場合の初対面、友人場面別の終助詞の使用率を比較する。表 2-3 に、場面別の母語話者の終助詞「ね」「よ」「よね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合（%）、及び、カイ二乗検定の結果を示す。

表 2-3 母語話者の「ね」「よ」「よね」の使用頻度と割合 (%)：初対面場面と友人場面による違い

場面	終助詞総数	総発話文数
初対面場面	117*** (15.06)	777 (100)
友人場面	294*** (23.73)	1239 (100)

$\chi^2(1) = 21.589, p = 3.377e-06$ ***: $p < .001$

表 2-3 から、母語話者が上級学習者と話す際、初対面場面 (15.06%) よりも友人同士場面 (23.73%) のほうが終助詞の使用率が有意に高いことがわかった。

続いて、母語話者との会話における上級学習者による初対面、友人場面別の終助詞の使用率を比較する。表 2-4 に、場面別の上級学習者の終助詞「ね」「よ」「よね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合 (%), 及び、カイ二乗検定の結果を示す。

表 2-4 上級学習者の「ね」「よ」「よね」の使用頻度と割合 (%)：初対面場面と友人場面による違い

場面	終助詞総数	総発話文数
初対面場面	151 (17.40)	868 (100)
友人場面	207 (20.23)	1023 (100)

表 2-4 からわかるように、上級学習者の場合、終助詞の使用率は初対面会話 (17.40%) と友人同士の会話 (20.23%) に有意な差はない。つまり、上級学習者は、表 2-3 で示した母語話者のようには、対話相手との親疎関係によって終助詞を使い分けていないことがわかる。

4.1.2 友人場面における母語話者の対話相手 (上級学習者, 初級学習者) 別の終助詞「ね」「よ」「よね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合

次の表 2-2 (再掲) と表 2-5 に、友人場面における母語話者の対話相手 (上級学習者, 初級学習者) 別の終助詞「ね」「よ」「よね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合 (%), 及び、カイ二乗検定の結果を示す。

表 2-2 (再掲) 母語話者と上級学習者による「ね」「よ」「よね」の使用頻度と割合 (%) : 友人場面 (5 会話)

話者	終助詞総数	総発話文数
母語話者	294 (23.73)	1239 (100)
上級学習者	207 (20.23)	1023 (100)

表 2-5 母語話者と初級学習者による「ね」「よ」「よね」の使用頻度と割合 (%) : 友人場面 (5 会話)

話者	終助詞総数	総発話文数
母語話者	105*** (10.53)	997 (100)
初級学習者	35*** (3.85)	909 (100)

$$\chi^2(1) = 30.213, p = 3.871e-08$$

$$***: p < .001$$

上記の表 2-2 と表 2-5 を見ると、友人同士の母語話者と上級学習者の会話においては、有意な差はなかったが、初級学習者との会話においては、初級学習者の終助詞使用が母語話者よりも有意に少なかったことがわかる。

次に、友人場面における対話相手に応じた母語話者の終助詞の使用率を比較する。次の表 2-6 に、母語話者の対上級学習者との会話と対初級学習者との会話における終助詞「ね」「よ」「よね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合 (%), 及び、カイ二乗検定の結果を示す。

表 2-6 友人場面における母語話者の対話相手に応じた「ね」「よ」「よね」の使用頻度と割合 (%) : 対話相手 (上級学習者, 初級学習者) による違い

対話相手	終助詞総数	総発話文数
上級学習者	294*** (23.73)	1239 (100)
初級学習者	105*** (10.53)	997 (100)

$$\chi^2(1) = 64.736, p = 8.565e-16$$

$$***: p < .001$$

表 2-6 からわかるように、母語話者の終助詞使用率は、上級学習者との会話においては 23.73% であるのに対して、初級学習者との会話においては、10.53% と半数以下になっている点は注目に値する (有意差あり)。友人同士の場面において、上級学習者と話す時よりも、初級学習者と話す時のほうが終助詞の使用が少ないのは、相手の日本語能力に配慮して使い分けしているためであると考えられる。

続いて、次の表 2-7 に、友人である母語話者との会話における上級学習者と初級学習者による終助詞の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合 (%), 及び、カイ二乗検定の結果を示す。

表 2-7 友人場面における上級学習者と初級学習者の「ね」「よ」「よね」の使用頻度と割合 (%)

話者	終助詞総数	総発話文数
上級学習者	207*** (20.23)	1023 (100)
初級学習者	35*** (3.85)	909 (100)

$\chi^2(1) = 116.43, p < 2.2e-16$ ***: $p < .001$

表 2-7 からわかるように、友人同士の会話においては、初級学習者の終助詞の使用率が 3.85% となっており、上級学習者 (20.23%) と比べて有意に低い。これは、初級学習者が、まだ、終助詞を母語話者や上級学習者と同様に使用できるようになっていないことを示している。初級学習者の終助詞使用率が、相手の母語話者の使用率 (10.53%) (表 2-5 参照) のみならず、上級学習者 (20.23%) よりも少ないのは、日本語の語用論的能力に関係していると考えられる。

4.2 終助詞「ね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合

以下には、終助詞「ね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合について、4.2.1 には母語話者と上級学習者による初対面場面と友人場面の場面別の結果、4.2.2 には友人場面における母語話者の対話相手 (上級学習者、初級学習者) 別の結果を示す。

4.2.1 母語話者と上級学習者による初対面場面と友人場面における終助詞「ね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合

まず、表 3-1 と表 3-2 に、母語話者と上級学習者による初対面場面と友人場面における終助詞「ね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合 (%), 及び、カイ二乗検定の結果を示す。

表 3-1 母語話者と上級学習者による「ね」の使用頻度と割合 (%) : 初対面場面 (5 会話)

話者	「ね」の総数	総発話文数
母語話者	59 (7.59)	777 (100)
上級学習者	75 (8.64)	868 (100)

表 3-2 母語話者と上級学習者による「ね」の使用頻度と割合 (%) : 友人場面 (5 会話)

話者	「ね」の総数	総発話文数
母語話者	151*** (12.19)	1239 (100)
上級学習者	69*** (6.74)	1023 (100)

$\chi^2(1) = 18.289, p = 1.898e-05$ ***: $p < .001$

「ね」の使用率を話者間で場面別に比較した場合、初対面場面においては、母語話者と上級学習者による「ね」の使用率は同程度（有意差なし）であったが、友人同士の場面においては、母語話者のほうが、「ね」の使用率が有意に高かった。

次に、話者ごとの場面別の「ね」の使用率から場面によって使い分けられているかを観察する。表 3-3 に、母語話者の対上級学習者の場合の、初対面と友人場面別の終助詞「ね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合（%）、及び、カイ二乗検定の結果を示す。

表 3-3 母語話者による「ね」の使用頻度と割合（%）：
初対面場面と友人場面による違い

場面	「ね」の総数	総発話文数
初対面場面	59** (7.59)	777 (100)
友人場面	151** (12.19)	1239 (100)

$$\chi^2(1) = 10.313, p = .001321$$

$$** : p < .01$$

表 3-3 からわかるように、母語話者は、相手が上級学習者の場合、初対面場面（7.59%）よりも、友人場面（12.19%）のほうで「ね」を有意に多用していた。

次の表 3-4 に、上級学習者による、母語話者との初対面と友人場面別の終助詞「ね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合（%）、及び、カイ二乗検定の結果を示す。

表 3-4 上級学習者の「ね」の使用頻度と割合（%）：
初対面場面と友人場面による違い

場面	「ね」の総数	総発話文数
初対面場面	75 (8.64)	868 (100)
友人場面	69 (6.74)	1023 (100)

表 3-4 からわかるように、上級学習者は、初対面場面（8.64%）と友人場面（6.74%）とで、使用率は同程度で有意差はなかった。上級学習者は、母語話者のようには、対話相手との親疎関係によって「ね」を使い分けていないことがわかる。

4.2.2 友人場面における母語話者の対話相手（上級学習者、初級学習者）別の終助詞「ね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合

次の表 3-2（再掲）と表 3-5 に、友人場面における母語話者の対話相手（上級学習者、初級学習者）別の終助詞「ね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合（%）、及び、カイ二乗検定の結果を示す。

表 3-2 (再掲) 母語話者と上級学習者による「ね」の使用頻度と割合 (%) : 友人場面 (5 会話)

話者	「ね」の総数	総発話文数
母語話者	151*** (12.19)	1239 (100)
上級学習者	69*** (6.74)	1023 (100)

$\chi^2(1) = 18.289, p = 1.898e-05$ ***: $p < .001$

表 3-5 母語話者と初級学習者による「ね」の使用頻度と割合 (%) : 友人場面 (5 会話)

話者	「ね」の総数	総発話文数
母語話者	70*** (7.02)	997 (100)
初級学習者	30*** (3.30)	909 (100)

$\chi^2(1) = 12.503, p = .0004063$ ***: $p < .001$

表 3-2 と表 3-5 を見ると、上級学習者との会話においても、初級学習者との会話においても、母語話者のほうが、「ね」の使用率が有意に高かった。

次に、母語話者の対話相手に応じた「ね」の使用率を比較する。次の表 3-6 に、友人場面における母語話者の終助詞「ね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合 (%) を、対話相手が上級学習者の場合と初級学習者の場合に分けて示す (カイ二乗検定の結果を含む)。

表 3-6 友人場面における母語話者の対話相手に応じた「ね」の使用頻度と割合 (%) : 対話相手 (上級学習者, 初級学習者) による違い

対話相手	「ね」の総数	総発話文数
上級学習者	151*** (12.19)	1239 (100)
初級学習者	70*** (7.02)	997 (100)

$\chi^2(1) = 15.979, p = 6.404e-05$ ***: $p < .001$

友人場面の場合、母語話者は、相手が初級学習者 (7.02%) の場合よりも、上級学習者 (12.19%) に対してのほうが、「ね」の使用率が有意に高かった。これは、母語話者が対話相手の日本語レベルに合わせて「ね」を使い分けているためと考えられる。

続いて、友人場面における上級学習者と初級学習者による「ね」の使用率を比較するため、表 3-7 に、友人である母語話者との会話における上級学習者と初級学習者による「ね」の頻度と当該話者の総発話文数に占める割合 (%), 及び、カイ二乗検定の結果を示す。

表 3-7 友人場面における上級学習者と初級学習者の「ね」の使用頻度と割合 (%)

話者	「ね」の総数	総発話文数
上級学習者	69*** (6.74)	1023 (100)
初級学習者	30*** (3.30)	909 (100)

$$\chi^2(1) = 11.049, p = .0008875$$

$$***: p < .001$$

表 3-7 からわかるように、友人同士の母語話者との会話においては、初級学習者 (3.30%) よりも、上級学習者 (6.74%) のほうが、「ね」の使用率が有意に高かった。

4.3 終助詞「よ」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合

以下には、終助詞「よ」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合について、4.3.1 には母語話者と上級学習者による初対面場面と友人場面の場面別の結果、4.3.2 には友人場面における母語話者の対話相手 (上級学習者、初級学習者) 別の結果を示す。

4.3.1 母語話者と上級学習者による初対面場面と友人場面における終助詞「よ」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合

次の表 4-1 と表 4-2 に、初対面と友人場面別の、母語話者と上級学習者による終助詞「よ」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合 (%), 及び、カイ二乗検定の結果を示す。

表 4-1 母語話者と上級学習者による「よ」の使用頻度と割合 (%): 初対面場面 (5 会話)

話者	「よ」総数	総発話文数
母語話者	26** (3.35)	777 (100)
上級学習者	55** (6.34)	868 (100)

$$\chi^2(1) = 7.2047, p = .007271$$

$$**: p < .01$$

表 4-2 母語話者と上級学習者による「よ」の使用頻度と割合 (%): 友人場面 (5 会話)

話者	「よ」総数	総発話文数
母語話者	51*** (4.12)	1239 (100)
上級学習者	76*** (7.43)	1023 (100)

$$\chi^2(1) = 10.989, p = .0009168$$

$$***: p < .001$$

表 4-1 と表 4-2 からわかるように、初対面と友人のいずれの場面においても、母語話者よりも、上級学習者のほうが、「よ」の使用率が有意に高かった。「よ」に関して、学習者が過剰使用していることが指摘されている (崔 2017) が、特に初対面の相手に対しては、押し付けがましいと

いう印象を与えてしまう恐れがあるため、注意を要する。

次に、母語話者と上級学習者の場面別の「よ」の使用率を観察する。表 4-3 には母語話者、表 4-4 には上級学習者の、場面別の終助詞「よ」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合(%)、及び、カイ二乗検定の結果を示す。

表 4-3 母語話者の「よ」の使用頻度と割合(%)：
初対面場面と友人場面による違い

場面	「よ」の総数	総発話文数
初対面場面	26 (3.35)	777 (100)
友人場面	51 (4.12)	1239 (100)

表 4-4 上級学習者の「よ」の使用頻度と割合(%)：
初対面場面と友人場面による違い

場面	「よ」の総数	総発話文数
初対面場面	55 (6.34)	868 (100)
友人場面	76 (7.43)	1023 (100)

表 4-3 と表 4-4 からわかるように、母語話者と上級学習者ともに、「よ」の使用率は、初対面場面と友人場面との場面による有意な差は見られなかった。ただ、表 4-1 と表 4-2 から明らかになったように、上級学習者のほうが、両場面において母語話者より「よ」の使用率が高いことには、注意をする必要がある。

4.3.2 友人場面における母語話者の対話相手（上級学習者、初級学習者）別の終助詞「よ」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合

次の表 4-2（再掲）と表 4-5 に、友人場面における母語話者の対話相手（上級学習者、初級学習者）別の終助詞「よ」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合(%)、及び、カイ二乗検定の結果を示す。

表 4-2（再掲） 母語話者と上級学習者による「よ」の使用頻度と割合(%)：友人場面（5 会話）

話者	「よ」総数	総発話文数
母語話者	51*** (4.12)	1239 (100)
上級学習者	76*** (7.43)	1023 (100)

$\chi^2(1) = 10.989, p = .0009168$

***: $p < .001$

表 4-5 母語話者と初級学習者による「よ」の使用頻度と割合 (%) : 友人場面 (5 会話)

話者	「よ」総数	総発話文数
母語話者	18** (1.81)	997 (100)
初級学習者	3** (0.33)	909 (100)

$$\chi^2(1) = 8.1929, p = .004206$$

$$** : p < .01$$

友人場面の場合、母語話者よりも、上級学習者による「よ」の使用率が有意に高いが、学習者の日本語能力が初級レベルの場合、初級学習者による「よ」の使用率が、母語話者より有意に低かった。これらの結果から、初級学習者は、上級学習者が多用しがちである終助詞「よ」についても、あまり使用ができていないことがわかる。

次に、母語話者の対話相手に応じた「よ」の使用率を比較する。次の表 4-6 に、友人場面における、対話相手が上級学習者の場合と初級学習者の場合の母語話者の終助詞「よ」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合 (%), 及び、カイ二乗検定の結果を示す。

表 4-6 友人場面における母語話者の対話相手に応じた「よ」の使用頻度と割合 (%) : 対話相手 (上級学習者, 初級学習者) による違い

対話相手	「よ」の総数	総発話文数
上級学習者	51** (4.12)	1239 (100)
初級学習者	18** (1.81)	997 (100)

$$\chi^2(1) = 9.1066, p = .002547$$

$$** : p < .01$$

表 4-6 からわかるように、母語話者は、友人場面においては、上級学習者 (4.12%) に対してのほうが、初級学習者 (1.81%) に対する場合より、有意に終助詞の使用率が高い。

続いて、上級学習者と初級学習者による「よ」の使用率を比較する。表 4-7 に、友人である母語話者との会話における上級学習者と初級学習者による「よ」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合 (%), 及び、カイ二乗検定の結果を示す。

表 4-7 友人場面における上級学習者と初級学習者の「よ」の使用頻度と割合 (%)

話者	「よ」の総数	総発話文数
上級学習者	76*** (7.43)	1023 (100)
初級学習者	3*** (0.33)	909 (100)

$$\chi^2(1) = 60.055, p = 9.226e-15$$

$$*** : p < .001$$

友人場面においては、初級学習者による終助詞の使用率が上級学習者よりも有意に低く、909発話文中3例と、1%にも至らないという結果になっている。

4.4 終助詞「よね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合

以下には、終助詞「よね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合について、4.4.1には母語話者と上級学習者による初対面場面と友人場面の場面別の結果、4.4.2には友人場面における母語話者の対話相手（上級学習者、初級学習者）別の結果を示す。

4.4.1 母語話者と上級学習者による初対面場面と友人場面における終助詞「よね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合

表5-1と表5-2に、母語話者と上級学習者による初対面場面と友人場面における終助詞「よね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合（%）、及び、カイ二乗検定の結果を場面別に示す。

表5-1 母語話者と上級学習者による「よね」の使用頻度と割合（%）：初対面場面（5会話）

話者	「よね」総数	総発話文数
母語話者	32 (4.12)	777 (100)
上級学習者	21 (2.42)	868 (100)

表5-2 母語話者と上級学習者による「よね」の使用頻度と割合（%）：友人場面（5会話）

話者	「よね」総数	総発話文数
母語話者	92 (7.43)	1239 (100)
上級学習者	62 (6.16)	1023 (100)

母語話者と上級学習者による終助詞「よね」の使用率は、初対面場面と友人場面のいずれにおいても、有意差はなかった。

次の表5-3と表5-4に、初対面と友人場面別の、母語話者と上級学習者による終助詞「よね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合（%）、及び、カイ二乗検定の結果を示す。

表 5-3 母語話者の「よね」の使用頻度と割合 (%) : 初対面場面と友人場面による違い

場面	「よね」の総数	総発話文数
初対面場面	32** (4.12)	777 (100)
友人場面	92** (7.43)	1239 (100)

$$\chi^2(1) = 8.4829, p = .003585 \quad **: p < .01$$

表 5-4 上級学習者の「よね」の使用頻度と割合 (%) : 初対面場面と友人場面による違い

場面	「よね」の総数	総発話文数
初対面場面	21*** (2.42)	868 (100)
友人場面	62*** (6.16)	1023 (100)

$$\chi^2(1) = 13.981, p = .0001847 \quad ***: p < .001$$

表 5-3 と表 5-4 からわかるように、母語話者と上級学習者のいずれも、初対面場面よりも、友人場面のほうで「よね」を有意に多く使用している。

4.4.2 友人場面における母語話者の対話相手（上級学習者、初級学習者）別の終助詞「よね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合

次の表 5-2（再掲）と表 5-5 に、友人場面における母語話者の対話相手（上級学習者、初級学習者）別の終助詞「よね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合 (%), 及び、カイ二乗検定の結果を示す。

表 5-2（再掲） 母語話者と上級学習者による「よね」の使用頻度と割合 (%) : 友人場面（5 会話）

話者	「よね」総数	総発話文数
母語話者	92 (7.43)	1239 (100)
上級学習者	62 (6.16)	1023 (100)

表 5-5 母語話者と初級学習者による「よね」の使用頻度と割合 (%) : 友人場面（5 会話）

話者	「よね」総数	総発話文数
母語話者	17** (1.71)	997 (100)
初級学習者	2** (0.22)	909 (100)

$$\chi^2(1) = 9.1742, p = .002454 \quad **: p < .01$$

表 5-2 と表 5-5 からわかるように、友人同士の会話における上級学習者は、対話相手の母語話者と比べて、「よね」の使用率に有意な差は見られなかったが、初級学習者の「よね」の使用率は、909 発話文数中、2 例のみ (0.22%) に過ぎず、対話相手の母語話者が、997 発話文中 17 例 (1.71%) 使用しているのに比べて、有意に低かった。

次に、母語話者の対話相手に応じた「よね」の使用率を比較する。次の表 5-6 に、友人場面における母語話者の上級学習者と初級学習者に対する終助詞「よね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合 (%), 及び、カイ二乗検定の結果を示す。

表 5-6 友人場面における母語話者の対話相手に応じた「よね」の使用頻度と割合 (%): 対話相手 (上級学習者, 初級学習者) による違い

対話相手	「よね」の総数	総発話文数
上級学習者	92*** (7.43)	1239 (100)
初級学習者	17*** (1.71)	997 (100)

$$\chi^2(1) = 37.759, p = 8.005e-10$$

$$***: p < .001$$

表 5-6 に見るように、母語話者は、友人同士の会話においては、相手が上級学習者 (7.43%) の場合と比べて、初級学習者 (1.71%) の場合のほうが「よね」の使用率が低い (有意差あり)。

続いて、友人場面における上級学習者と初級学習者による「よね」の使用率を比較するため、表 5-7 に、友人である母語話者との会話における上級学習者と初級学習者による「よね」の使用頻度と当該話者の総発話文数に占める割合 (%), 及び、カイ二乗検定の結果を示す。

表 5-7 友人場面における上級学習者と初級学習者の「よね」の使用頻度と割合 (%)

話者	「よね」の総数	総発話文数
上級学習者	62*** (6.16)	1023 (100)
初級学習者	2*** (0.22)	909 (100)

$$\chi^2(1) = 49.455, p = 2.029e-12$$

$$***: p < .001$$

表 5-7 からわかるように、「よね」の使用率は、友人同士の会話においては、上級学習者の 1023 発話文中 62 例 (6.16%) に比べて、初級学習者は、909 発話文中 2 例 (1% 未満) と、有意に低かった。

4.5 母語話者と学習者による終助詞「ね」「よ」「よね」それぞれの頻度と 3 種の終助詞総数に占める割合

次の表 6-1, 表 6-2, 表 6-3 に、母語話者と学習者 (上級, 初級) による終助詞「ね」「よ」「よね」それぞれの使用頻度と当該話者による 3 種の終助詞総数に占める割合 (%) を、初対面場面、

友人場面別に示す。

表 6-1 母語話者と上級学習者による「ね」「よ」「よね」の使用頻度と割合 (%) : 初対面場面 (5 会話)

話者	初対面場面 : 5 会話			
	「ね」総数	「よ」総数	「よね」総数	終助詞総数
母語話者	59 (50.43)	26 (22.22)	32 (27.35)	117 (100)
上級学習者	75 (49.67)	55 (36.42)	21 (13.91)	151 (100)

表 6-2 母語話者と上級学習者による「ね」「よ」「よね」の使用頻度と割合 (%) : 友人場面 (5 会話)

話者	友人場面 : 5 会話			
	「ね」総数	「よ」総数	「よね」総数	終助詞総数
母語話者	151 (51.36)	51 (17.35)	92 (31.29)	294 (100)
上級学習者	69 (33.33)	76 (36.71)	62 (29.95)	207 (100)

表 6-3 母語話者と初級学習者による「ね」「よ」「よね」の使用頻度と割合 (%) : 友人場面 (5 会話)

話者	友人場面 : 5 会話			
	「ね」総数	「よ」総数	「よね」総数	終助詞総数
母語話者	70 (66.67)	18 (17.14)	17 (16.19)	105 (100)
初級学習者	30 (85.71)	3 (8.57)	2 (5.71)	35 (100)

表 6-1 と表 6-2 からわかるように、母語話者は、初対面場面においても、友人場面においても、「ね」の使用率が最も高く (50.43%, 51.36%), 次いで「よね」が 27.35% と 31.29% で、「よ」が 22.22% と 17.35% で最も低かった。つまり、いずれの場面でも、「ね」 > 「よね」 > 「よ」の順に終助詞の使用率が高い。それに対して、上級学習者は、初対面場面においては「ね」の使用率 (49.67%) が最も高く、「ね」 > 「よ」 > 「よね」の順に使用率が高いが、友人場面においては「よ」 (36.71%) が最も高く、「よ」 > 「ね」 > 「よね」の順に使用率が高い。4.3 でも言及したように、「よ」の多用は、押し付けがましくなってしまうこともあるため、注意を要する。

また、表 6-2 と表 6-3 からわかるように、友人場面において、母語話者は「ね」を最も多く用いている (51.36%, 66.67%)。また、相手が上級学習者の場合では、「よ」 (17.35%) よりも「よね」 (31.29%) の使用率が高いが、初級学習者の場合では、「よ」 (17.14%) と「よね」 (16.19%) は、いずれも同程度の使用率である。これは、対話相手の日本語能力を配慮しているためと考えられる。一方、初級学習者も「ね」 (85.71%) を最も多く用いているが、「よ」は、35 例中 3 例 (8.57%) と「よね」は、35 例中 2 例 (5.71%) であり、母語話者のみならず、上級学習者と比べても圧倒的に少なかった。これは、学習者の日本語レベルが影響しているためと考えられる。

4.6 上級学習者と初級学習者による場面別の不自然な終助詞「ね」「よ」「よね」の使用傾向

以上, 4.1～4.5では, 場面別に, 母語話者と学習者(上級, 初級)による終助詞「ね」「よ」「よね」の使用傾向を明らかにした。ここでは, 上級学習者と初級学習者による不自然な終助詞の使用傾向を場面別に示す。

全15会話中, 不自然な終助詞は19例見られた。以下の表7に, 学習者による不自然な終助詞「ね」「よ」「よね」の出現頻度と当該終助詞の使用総数に占める割合(%)を, 場面別に示す。

表7 学習者による不自然な「ね」「よ」「よね」の頻度と割合(%)

話者 終助詞	初対面場面における 上級学習者: 5名				友人場面における 上級学習者: 5名				友人場面における 初級学習者: 5名			
	ね	よ	よね	合計	ね	よ	よね	合計	ね	よ	よね	合計
不自然な例	6 (8.00)	1 (1.82)	1 (4.76)	8 (5.30)	2 (2.90)	0 (0.00)	3 (4.84)	5 (2.42)	3 (10.00)	2 (66.67)	1 (50.0)	6 (17.14)
総数(100)	75	55	21	151	69	76	62	207	30	3	2	35

表7からわかるように, 上級学習者は, 初対面場面においては, 不自然な終助詞としては, 「ね」が, 75例中6例(8%)と最も多く, 友人場面においては, 「よね」(4.84%)が, 「ね」(2.9%)より多いが, それぞれ69例中2例, 62例中3例であり, 概して, 不自然な使用は少ないと言える。一方, 初級学習者は, 「ね」の使用こそ, 30例中3例で10%と割合は低いが, 「よ」「よね」については, それぞれ, 3例中2例, 2例中1例が不自然とみなされており, 「よ」「よね」の使用の半分以上が「不自然」なものであることがわかる。このことから, 初級学習者は, 「よ」と「よね」よりは, 「ね」のほうが適切な使用の習得が進んでおり, 「よ」「よね」の習得が不十分であることが窺える。習得順序については, 今後の興味深い課題である。一方, 上級学習者が多く用いていた「よ」については, 不自然な例はほとんど見られなかった。「よ」は, 文脈によって, あるいは, 多用すると押し付けがましい感じがするため, 注意を要するが, 本研究の結果では, 上級学習者の「よ」に, 不自然な使用は, ほとんど見られなかった。これは, 文レベルで判断すると, 大きな問題とは感じられないが, その数が多くなると, 談話レベルの数の効果として, 「よ」の使用が押し付けがましいという印象を生む可能性があることを示唆している。今後, 談話レベルの分析が必要である。

以上, 母語話者と学習者(上級, 初級)による終助詞「ね」「よ」「よね」について, 定量的に分析した。結果は, 次の10点にまとめられる。

- ① 初対面会話, 友人同士の会話いずれにおいても, 母語話者と上級学習者の終助詞全体の使用率自体には有意な差はなかった。(表2-1, 2-2)
- ② 母語話者は初対面の会話より友人同士の会話で, 終助詞の使用率が有意に高かったのに対して, 上級学習者は, 場面による有意差はなかった。(表2-3, 2-4)
- ③ 母語話者は, 初級学習者に対して, 上級学習者に対するより終助詞の使用率が有意に低かつ

た。(表 2-6)

- ④ 一方、学習者については、初級学習者の終助詞の使用率が、母語話者のみならず、上級学習者と比べても有意に低かった。(表 2-5, 2-7)
- ⑤ 終助詞別に見ると、まず、友人場面における母語話者による「ね」の使用率は、上級学習者よりも有意に高かった。(表 3-2)
- ⑥ 母語話者は、初対面の会話より友人同士の会話で、「ね」の使用率が有意に高かったのに対して、上級学習者は、場面による有意差はなかった。(表 3-3, 3-4)
- ⑦ 上級学習者による「よ」の使用率は、初対面会話、友人同士の会話のいずれにおいても母語話者よりも有意に高かった。(表 4-1, 4-2)
- ⑧ 初級学習者は、そもそも終助詞の使用頻度が低く、上級学習者が多用している「よ」もほとんど使用していなかった。(表 4-7)
- ⑨ 母語話者と上級学習者ともに、初対面の会話より友人同士の会話で、「よね」の使用率が有意に高かった。(表 5-3, 5-4)
- ⑩ 上級学習者が多用していた「よ」に関しては、不自然な使用はほとんど見られなかった。初級学習者は、「よ」「よね」に比べて、「ね」の使用率が高いが、不自然な使用は比較的少なく、使用率の低い「よ」と「よね」については、不自然なものが多かった。(表 7)

上記の結果から、以下の 5 点が示唆された。

- ① 母語話者は、初対面と友人同士の場面によって「ね」を使い分けているのに対して、上級学習者は、場面に応じた「ね」の使い分けをしていない。
- ② 母語話者は、相手の日本語のレベルに応じて終助詞の使用率を変えている。
- ③ 上級学習者が多用する「よ」は、談話レベルの数の効果として、「よ」の使用が押し付けがましいという印象を生む可能性がある。
- ④ 初級学習者は、「よ」「よね」の習得が進んでいないと考えられる。
- ⑤ 日本語学習者の不自然な終助詞の使用は、「文」に問題がなくても、前後の文脈や状況を考えると不自然なことが多いため、終助詞が不自然になる要因を一つに絞ることは難しい。

次の第 5 節では、本研究で見られた不自然な終助詞の要因について、具体例を示しながら探っていく。

5. 定性的分析の結果

本節では、学習者による終助詞使用の不自然さの要因を考察する。以下、本研究における不自然な終助詞の仮分類の定義を再掲する。タイプ C 「必要な箇所での欠如」(2 例) は、表 7 には反映されていないが、実際の談話の流れを見て判断する。

タイプ A 「異なる終助詞の混同」: 「ね」「よ」「よね」の中の他の終助詞を選択すべき場合

タイプ B 「不必要な付加」: 終助詞を付加すべきではないところに付加されている場合

タイプC 「必要な箇所での欠如」：終助詞を使用すべきところに使用されていない場合

タイプD 「周辺要素との絡み」：「のだ」や丁寧体・非丁寧体など前後のモダリティ表現に問題がある場合

上記の分類に基づいてコーディングを行った結果、学習者による不自然な終助詞は、不自然と感じられる要因が複数考えられるものもあれば、不自然さを生み出す要因の特定が難しい場合もある。以下、不自然な終助詞の会話例を示しながら説明していく。

会話例1：「ね」（友人場面における上級学習者によるタイプA「異なる終助詞の混同」の例）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
105	94		JF179	でもね、あ、そう、背が低いといえば、あれだけど、なんか、私がタイにいた時に（はい）、中国人の先生がいたのね（はい）、
106		*	JF179	その人がすごい背が高くて（はい）、本当になんだろう、170、あ、180センチぐらい??（はい）、男の人なんだけどもね、だからだけど、たぶん（はい）、すごく背が高くて、ね、その人がね（はー）、たぶん来月ぐらいに日本にくるかもしれないって言って、遊びに。
107	95	*	CFA009	あ、タイで教えてた…。
108	96	*	JF179	タイで教えてた人が（はい）、日本に、まあ、し、あ、仕事と遊びで（はい）来るかもしれないけど、何かね、その人ってね、性格がすごくあまのじゃくなのね、（《笑い》はい）でね、ちゅ、で、何か、中国語で何ていうの？「あまのじゃく」。
109	97	*	CFA009	なんていうだろう、あまのじゃく? ↑よく分からない、ちょっと待ってください、あまのじゃく? ↑。
110	98	*	JF179	ん、何ていうの?、《沈黙2秒》何ていうだろう。
111	99	*	CFA009	でもその人って中国人だね、何のビザで来れるんですか?。
112	100	*	JF179	ちいさいビジネスを（はい）しているから、それでくるんじゃないかなと思うんだけど、なんていうんだろう。

JF179：母語話者、CFA009：中国人上級日本語学習者

母語話者 JF179 が発話文 94 で、上級学習者 CFA009 にある中国人の先生について話している。その後発話文 99 で、上級学習者 CFA009 が再度その先生に言及する際に、「その人って中国人だね」と「ね」を使用して、相手が先に示した情報を再度確認している。ここでは、「よね」と置き換えることによって自然に感じるため、不自然の要因は「ね」と「よね」の混同、つまり、タイプA「異なる終助詞の混同」と言える。終助詞の混同に関しては、「情報の相対的所有度」（メイナード 1993）などの観点から説明がつく。

会話例 2: 「欠如」(友人場面における上級学習者によるタイプ C 「必要な箇所での欠如」の例)

260	229	*	CFA006	W 先生の授業をとりょうとしたんですけど。
261	230	*	JF176	あー、でも###学でしょう。
262	231	*	CFA006	うん。
263	232		JF176	なんかね、あんまりないみたいなんだよね、
264		*	JF176	国際協力の基礎の本、簡単に書いてあるやつ、何なんだろうね。
265	233	*	CFA006	<笑い>何か新しい勉強が始まったという感じ。
266	234		JF176	ねえ、
267			JF176	そっだよ、
268		*	JF176	今まで、だってね、日本文学だもんね。
269	235	*	CFA006	そうです、なんか、来てからいきなり日本語学を(ねー)、日本語もまだまだだったし、はい。
270			JF176	(ねー)
271	236	*	JF176	日本語かあ、でも日本語はたぶん一番出来るよね、あの研究生の中で、でも G さんも結構できるか。

JF176: 母語話者, CFA006: 中国人上級日本語学習者

母語話者 JF176 が、発話文 234 で、「ねえ」「そっだよ」「だってね」「日本文学だもんね」と 4 回共感求めを表す終助詞を使用しているのに対して、上級学習者 CFA006 が「そうです」と返答している。「そうですね」「そうね」のほうがふさわしいと思われるが、「そうです」が間違いとは言えない。これは、話者の心的態度、どのように相手に伝えたいかによるものであると考えられる。

会話例 3: 「よ」(初対面場面における上級学習者によるタイプ D 「周辺要素との絡み」の例)

226	213	*	TFA011	あ、一応、(うん) 四季があるけどー、季節が(うん)、でも、日本のようななんかちゃんとはっきりしてるんじゃない。
227	214	*	JF135	うんうん。
228	215	*	TFA011	冬としても、あたしにとって今のあたしにとってはまあ、(うん) あんまり、寒くないって感じで(うんうんうん)。
229	216	*	TFA011	前、春休みの時、向こう帰ったの(うん)。
230	217	*	TFA011	さー、みんなーほとんど、長袖で(うん)、セーターでいるよ、人(うん)。
231	218	*	TFA011	私は半袖で、出掛けたの(うん)。
232	219	*	TFA011	皆“へ？(<笑い>)、なんだよ、あの人”ってか、皆がすごい“えー”って(うんうんうん)、友達なんか“TFA011[TFA011の名前]ちゃん、ちょっとどうしたの？”って(うんうんうん)、“夏？”って(<笑い>)、“夏？”と言われたよ、私(うん)。

JF135: 母語話者, TFA011: 台湾人上級日本語学習者

上級学習者 TFA011 が母語話者 JF135 に春休みに台湾に帰った時、みんなが長袖のセーターでいることに驚いたという経験談を話している。発話文 217 の「セーターでいるよ」が不自然に感じるのは、「のだ」が脱落しているためであると考えられる。「セーターでいるのよ」か「セー

ターでいるんですよ」だと自然である。ここで丁寧体を使うか否かは、話者の気持ち次第であると思われる。

会話例 4: 「よね」(初対面場面における上級学習者による二つの要因が考えられる例 (タイプ A 「異なる終助詞の混同」 + タイプ D 「周辺要素との絡み」))

610	581	*	CFA007	出身の大学はどこ？。
611	582	*	JF177	ここ。
612	583	*	CFA007	あ～、大丈夫よ。
613	584	*	JF177	<笑いながら>大丈夫じゃない。
614	585	*	CFA007	本当に。
615	586	*	CFA007	うーん、なんか、ここ、なんか、結構学部生は、学部は結構入りにくいよね、難しい。
616	587	*	JF177	難しい。
617	588	*	CFA007	なんか、普段で塾に…<通わないと>{<}。
618	589	*	JF177	<私 1 浪したの>{>}。
619	590	*	JF177	だから 1 浪して (あー)、<入ったから>{<}。
620	591	*	CFA007	<なんか相当>{>} 苦労したよね。
621	592	*	JF177	苦労したよ、1 年間すごい勉強し続けて。
622	593	*	CFA007	どこで? [↑]。
623	594	*	JF177	実家のほうで、静岡で勉強<して>{<}。

JF177: 母語話者, CFA007: 中国人上級日本語学習者

上級学習者 CFA007 と母語話者 JF177 は初対面であるため、母語話者が受験時に苦労した経験を知っていたわけがない。それにもかかわらず、発話文 591 で「苦労したよね」と、「よね」を使用して確認要求をしている。ここでは、「苦労したんだね」と修正すべきである。つまり、「ね」と「よね」の混同、及び「のだ」の脱落のいずれも不自然さの要因として挙げられる。

会話例 5: 「ね」(友人場面における初級学習者による三つ以上の要因が考えられる例 (タイプ A 「異なる終助詞の混同」、タイプ B 「不必要な付加」、タイプ D 「周辺要素との絡み」))

201	186-1	/	CFN004	行ったことがない (ふーん)、あー、もっとも一番遠いところへ (うんうん) 行ったのは、*
202	187	*	JF174	大連？。
203	186-2	*	CFN004	あ、大連の南 (うん)、か、かほく '河北'？。
204	188	*	JF174	河北 ??、あ、はいはいはいはい (河北、河北の)、あの、huabei かな ??、あ、そっち、はいはいはいはいはい。
205	189	*	CFN004	河北、河北の北、何か、この川は有名ですな (ふーん)、中国のリーダー (うん)、あー、コ、えー ??、コウタクトウ、え ? ↑。
206	190-1	/	JF174	コウタク、

JF174: 母語話者, CFN004: 中国人初級日本語学習者

* 「1 発話文の途中で相手の発話が入った場合には、その途中の句末に英語式コンマ 2 つ 「,」 をつけ、その発話文が終わっていないことをマークする」(宇佐美 2020: 23)。

初級学習者 CFN004 が発話文 189 で、母語話者 JF174 に相手の知らないはずの中国のある川について紹介している。「この川は有名ですな」は不自然に感じるが、ここでは、「この川は有名ですよ」「この川は有名なんですな」「この川は有名なんですな」と何通りも考えることができ

る。つまり、タイプ A「異なる終助詞の混同」、あるいはタイプ D「周辺要素との絡み」、もしくはタイプ A「異なる終助詞の混同」とタイプ D「周辺要素との絡み」の両方にまたがるタイプのものと考えられる。一方で、ここでは「ね」を付加しないで、「この川は有名です」と発話するのも間違いとは言えない。つまり、タイプ B「不必要な付加」も要因として考えられる。話者の気持ち、何が伝えたかったかを理解しない限り、どの終助詞が適切かは、判断が難しい。

以上、定性的分析の結果により、以下の3点が明らかになった。

- ① 終助詞の使用が不自然かどうかの認定には、「談話レベルの文脈、状況」を考慮することが不可欠である。
- ② それに加えて、「話者の心的態度」も考慮する必要がある。
- ③ 実際の会話における終助詞の使用については、なぜ不自然と感じるかが明確に特定できるものとあいまいにしか判断できないものがある。前者は、「情報の相対的所有度」の観点などからある程度解釈できる。後者のあいまいなものについては、「談話レベルの文脈、状況」との関係性の観点から考察すれば、不自然さの原因がある程度特定できるものもあるが、②に書いたように、話者の心的態度、意図を考慮する必要があるものもあり、いくつかの可能性は考えられるものの、分析者が判断しかねるものもある。今後、これらの判断に寄与する要因を少しでも明らかにしていくことは有用である。

6. おわりに

本研究では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス』を用いて、日中接触場面の雑談における日本語母語話者と日本語学習者による終助詞「ね」「よ」「よね」の使用実態をまとめ、学習者による不自然な終助詞を中心に考察した。

その結果、母語話者は相手話者との親疎関係により終助詞を使い分けているが、学習者は、上級学習者でも、終助詞を場面に応じて適切に使い分けているとは言えない面があり、しかもそのことが、相手にいい印象をもたらさない恐れもある。これらのことから、日本語教育における終助詞の指導の仕方としては、対話相手との関係を考慮に入れて使い分ける必要があることを伝えることが考えられる。また、初級学習者は、そもそも終助詞の使用を十分に学習できていないため使用頻度自体が低く、不自然な使用が多かったことから、文脈を提示して経験的に習得させることなどが必要だろう。また、使用頻度は、母語話者と同等であった上級学習者が、「よ」に関しては、初対面場面、友人場面いずれにおいても母語話者よりも多用する傾向にあったという点は、注意を要する。日本語教育の観点からは、「よ」の多用は、相手や場面にもよるが、相手に押し付けがましい印象を与えてしまう恐れがあるということを十分に伝えて注意喚起することが重要であろう。

従来、「終助詞の不自然な使用」とされていたものは、単一の角度から解釈されることが多かったが、本研究のデータを観察した結果、文脈の重要性を再認識するとともに、文脈を考慮しても、

尚、多様な観点から解釈できるものもあるため、分析者の視点のみから不自然さの要因をすべて特定することは困難なものもあることがわかった。終助詞が不自然である要因は、談話レベルの前後の文脈や状況を考慮して特定していくことが必須であるが、その際に「終助詞使用時の学習者の心理」を考慮することの重要性も明らかになった。これらのことから、日本語教育における終助詞の使用の指導については、単文レベルではなく、実際の談話の文脈と、発話時の話者の心的態度も考慮することなど、学習者に多様な可能性を示すことによって、状況に応じたコミュニケーション能力の育成につなげていく必要があることを指摘した。一つの正解を教えるのではなく、多様な選択肢を提供することが、学習者が自分の気持ちに最も適した日本語を選択して自己表現ができるようになることにつながる。

理論的には、今後、各終助詞の機能を談話レベルの文脈と関連づけて、体系的に説明する方法を探る必要がある。

参考文献

- 伊豆原英子 (1993) 「終助詞『よ』『よね』『ね』の総合的考察—『よね』のコミュニケーション機能の考察を軸に—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』1: 21-34.
- 伊豆原英子 (2003) 「終助詞『よ』『よね』『ね』の再考」『愛知学院大学教養部紀要』51(2): 1-15.
- 宇佐美まゆみ (1997) 「『ね』のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」『女性のことば・職場編』241-268. 東京：ひつじ書房.
- 宇佐美まゆみ (2001) 「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想」『談話のポライトネス』(第7回国立国語研究所国際シンポジウム第4専門部会報告書) 9-58. 東京：凡人社.
- 宇佐美まゆみ (2008) 「相互作用と学習—ディスコース・ポライトネス理論の観点から」西原鈴子・西郡仁朗 (編) 『講座社会言語科学 第4巻 教育・学習』150-181. 東京：ひつじ書房.
- 宇佐美まゆみ (2013) 「会話データの作成・分析—『総合的会話分析』と『基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)』」『日本語学』32(14): 132-147. 東京：明治書院.
- 宇佐美まゆみ (2015) 「『総合的会話分析』の趣旨と方法—量的分析と質的分析の必然的融合—」特集「日本語教育の研究手法—『会話・談話の分析』という切り口から—」『日本語教育』162: 34-49.
- 宇佐美まゆみ (2019a) 「BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット (2019年改訂版)」『語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築とその多角的分析』平成 30 年度～令和 3 年度 科学研究費補助金基盤研究 (A) (課題番号 18H03581) (研究代表者：宇佐美まゆみ) 研究成果.
- 宇佐美まゆみ (2019b) 「『BTSJ 日本語自然会話コーパス 2018 年版』の活用法の紹介と終助詞『ね』, 『よ』, 『よね』の使用実態の分析」『日本語学会 2019 年度秋季大会予稿集』207-210.
- 宇佐美まゆみ (2020) 「『基本的な文字化の原則 (BTSJ) 2019 年改訂版』」宇佐美まゆみ (編) 『自然会話分析への語用論的アプローチ』17-42. 東京：ひつじ書房.
- 宇佐美まゆみ (監修) (2020) 『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2020 年版』, 国立国語研究所, 機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」.
- 大曾美恵子 (1986) 「誤用分析 1『今日はいいい天気ですね。』—『はい、そうです。』」『日本語学』5(9): 91-94. 東京：明治書院.
- 大曾美恵子 (2005) 「終助詞『よ』『ね』『よね』再考—雑談コーパスに基づく考察—」鎌田修・筒井通雄・畑佐由紀子・ナズキアン富美子・岡まゆみ (編) 3-15.
- 大浜のい子 (2004) 「終助詞『よ／ね』の機能再考—文脈指定機能を中心に—」『広島大学日本語教育研究』14: 1-7.
- 鎌田修・筒井通雄・畑佐由紀子・ナズキアン富美子・岡まゆみ (編) (2005) 『言語教育の新展開』東京：ひつじ書房.
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論—言語の機能的分析』東京：大修館書店.
- 木曾美耶子 (2013) 「中国人日本語学習者の会話における終助詞に対する母語話者評価」『國文論叢』46:

18-35.

- 金水敏・田窪行則 (1998) 「談話管理理論に基づく『よ』『ね』『よね』の研究」『音声による人間と機械の対話』257-271. 東京：オーム社.
- 高民定 (2008) 「接触場面における終助詞の言語管理—非母語話者の終助詞『ね』と『よ』の使用を中心に—」『千葉大学人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』198: 97-112.
- 高民定・崔英才 (2015) 「日本語学習者の終助詞『よ』『ね』『よね』の使用と習得問題—国内と海外における接触場面の会話データの分析から—」『한국언어연구학회 언어학연구』83-305.
- 崔英才 (2015) 「終助詞『ね』『よ』『よね』の談話上における機能分析—コーパス・データの母語場面の会話を中心に—」『千葉大学人文社会科学研究所』31: 94-115.
- 崔英才 (2016) 「接触場面における終助詞『ね』『よ』『よね』の機能分析—発話連鎖の視点から—」『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』307: 19-36.
- 崔英才 (2017) 「接触場面における日本語学習者の終助詞『ね』『よ』『よね』の使用に関する研究—発話連鎖効力と日本語母語話者との相互行為の分析を中心に—」千葉大学博士論文.
- 佐々木泰子 (1992) 「終助詞『ね』と丁寧さとのかわり」『言語文化と日本語教育』4: 1-10.
- 定延利之 (2016) 「終助詞『ね』『よ』『な』と状況との結びつき」『コミュニケーションへの言語的接近』309-312. 東京：ひつじ書房.
- 白川博之 (1992) 「終助詞『よ』の機能」『日本語教育』77: 36-48.
- 滝浦真人 (2008) 「終助詞『か／よ／ね』の意味とポライトネス—話者が直観的にしていることの長い説明—」『ポライトネス入門』124-154. 東京：研究社.
- 陳常好 (1987) 「終助詞—話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞—」『日本語学』6: 93-109.
- 伴紀子・架谷真知子 (1996) 「誤用からみた終助詞『ね』の指導法」『アカデミア 文学・語学編』61: 135-156.
- 中村洪 (2006) 「日本語の助詞『ね』の機能上と語用論的曖昧性」『語用論研究』8: 15-32.
- ナズキアン富美子 (2005) 「終助詞『よ』『ね』と日本語教育」鎌田修・筒井通雄・畑佐由紀子・ナズキアン富美子・岡まゆみ (編) 167-179.
- ナズキアン富美子 (2020) 「談話における終助詞『よね』—引き込みという観点から—」宇佐美まゆみ (編) 『日本語の自然会話分析—BTSJ から見たコミュニケーションの解明—』115-138. 東京：くろしお出版.
- 初鹿野阿れ (1994) 「初級日本語学習者の終助詞習得に関する一考察—『ね』を中心として—」『言語文化と日本語教育』4: 1-10.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』東京：くろしお出版.
- メイナード, K. 泉子 (1993) 『会話分析』東京：くろしお出版.
- 楊虹 (2008) 「日中接触場面の初対面会話における『ね』の分析—共感構築の観点から—」『研究紀要』15: 125-136.
- 楊虹 (2010) 「中国人日本語学習者の終助詞の使用に関する一考察」『お茶の水女子大学人文科学研究』6: 199-208.
- 吉田たか (2013) 「韓国人日本語学習者の終助詞『ね』の誤用パターン—OPI データの分析を中心に—」『日語日文学研究』84(1): 269-288.

関連 Web サイト

『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2022 年 3 月 NCRB 連動版』https://ninjal-usamilab.info/lab/btsj_corpus_2022/ (2022 年 6 月 8 日確認)。ただし、使用したデータは 2020 年版である。「基本的な文字化の原則 (BTSJ : Basic Transcription System for Japanese)」https://ninjal-usamilab.info/lab/about_btsj/background/ (2022 年 6 月 8 日確認)

Unnatural Use of the Sentence-final Particles *Ne*, *Yo*, and *Yone* in Casual Conversation by Learners of Japanese: Based on the BTSJ Japanese Natural Conversation Corpus

USAMI Mayumi^aZHANG Weiwei^b^aResearch Department, NINJAL^bWaseda University

Abstract

In this study, we investigate the use of the sentence-final particles *ne*, *yo*, and *yone* in casual conversation in Japanese-Chinese contact situations taken from the BTSJ Japanese Natural Conversation Corpus with Transcripts and Recordings (2020). We found that: (1) Japanese native speakers used sentence-final particles depending on whether their conversations were with people whom they had met for the first time or with friends, while advanced learners of Japanese did not change the use of these particles depending on the setting. (2) Advanced learners of Japanese tended to use *yo* frequently both in conversations with people whom they had met for the first time and with friends. (3) Novice learners of Japanese seldom used sentence-final particles compared to both native speakers and advanced learners, and had several instances of unnatural use. (4) There were several instances where learners' use of unnatural sentence-final particles was not problematic as a "sentence", but were unnatural when the context and situation before and after the sentence were taken into consideration, making it difficult to pinpoint the cause of the unnaturalness as a single factor. From these results, we suggest the following four points. To develop learners' communicative competence, it is essential to: (1) incorporate the use of sentence-final particles depending on the interpersonal relationship into teaching about conversation, (2) pay attention to the overuse of *yo*, because it may give the impression of being pushy, (3) present contexts for learners to acquire the use of sentence-final particles empirically, and (4) develop a method of teaching that considers the discourse-level context and psychological state in the usage of sentence-final particles, and not just its use in a single sentence level. Theoretically, the results suggest that in the future, we need to systematically explain the function of each sentence-final particle in relation to the discourse-level context.

Keywords: sentence-final particles, casual conversation, natural conversation corpus, learners of Japanese, unnatural use